

山田寺発掘調査報告

本文編

第I章 序 言

この報告は、奈良県桜井市山田（旧磯城郡安倍村大字山田）に所在する特別史跡『山田寺跡』において、奈良国立文化財研究所（2001年度から 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所。以下、同じ）飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、1976年度から1996年度にかけて実施した11次にわたる発掘調査の結果をとりまとめたものである¹⁾。

1 山田寺における調査の歩み

山田寺は、飛鳥の東を限る丘陵の西山裾、飛鳥から上ツ道へ斜めに走る阿倍山田道の近傍に所在する。この寺院については、江戸時代に著された『和州旧跡幽考』にも、特別の記載はみられない。荘厳であったろうかの大伽藍は、時代の流れの中に埋もれ去り、創建約一千年後の人々には、その記憶さえおぼろげになっていたのであろうか。しかしそのような中であっても、1841年（天保21）には、蘇我倉山田石川麻呂の後裔と称する越前藩士の山田重貞が、この寺跡の一部に「雪冤の碑」（穂井田忠友撰文、菘翁貫名海屋筆）を建てている。このことから雪 冤 の 碑

明治のはじめまでは、堂塔の跡には礎石が多く残っていたといわれる。しかし1874・1875年頃、講堂跡に小学校を建てるため礎石が割られたり、1888年（明治21）には塔心礎が盗掘されるなど、遺跡は荒れるにまかせられた。奈良県出身の考古学者である高橋健自が、1904年に寺跡を訪れた時、付近の住民から近年堂塔跡の土壇が崩され、礎石も持ち去られたことを聞いた。1900年代

そして、明治維新以降の急激な欧化主義が、急速に古蹟を荒廃させていく現状に警鐘を鳴らし、その一事例として山田寺を紹介している²⁾。そこでは、塔、金堂、講堂とそれらを囲む南北に長い回廊などから、四天王寺に類似する伽藍配置であったことを指摘している。この当時まだ、金堂跡には12個の、講堂跡には13個の礎石が残っていたというが、大正のはじめには金堂の礎石はわずか2個だけになっていた。その間に、心ない人によって礎石は売却されたらしく、これらの礎石の一部は、めぐり巡って今、大阪藤田美術館の構内に保管されている。

1917年（大正6）、現地の状況を実測調査した建築史家の天沼俊一は、その時点での伽藍の現況と講堂礎石の測量図を作製し、講堂については7×4間の建物であると指摘している³⁾。1935年、史蹟名勝天然記念物法が施行されるとすぐに、これらの調査成果にもとづいて、山田寺は史蹟に指定された（1935年3月3日付）。史 蹟 指 定

各地の史蹟の、発掘を含む調査に当たった上田三平は、1936年に山田寺跡を訪れ、その時の現況図を1928年に発刊された『奈良県に於ける指定史蹟 第2冊』に記している。そして、そ

1940年代 の中で講堂東北方の水田中から、かつて礎石20個が発見されたとの伝聞を紹介し、そこに僧房の存在を推定している。また、1932年に『大和上代寺院志』を著した保井芳太郎は、塔土壇南方の門跡と思われるところから8個の礎石が発見されたことを紹介しているし、同じく1936年にまとめられた石田茂作の大著『飛鳥時代寺院址の研究』では、講堂の東西両脇に回廊が取り付くいわゆる「四天王寺」式の伽藍配置を初めて想定した。1941年には大岡実が講堂礎石の精度の高い実測図を『建築史』第3巻第2号にのせている。

特別史跡に指定 以上のように、基壇跡を残す塔と金堂、礎石の配置をとどめる講堂、それに礎石の出土を伝える門跡などが、その名のとおり「山田」の地にひっそりと眠り続けていたのである。戦後は、史蹟名勝天然記念物法に代わって文化財保護法が制定され、1952年に山田寺跡は国の特別史跡に指定された。そして、1960年代の後半から飛鳥の歴史的風土を守ろうという気運が高まり、その一環として、1975年に指定地を国が買い上げ、史跡公園として整備しようとする計画が持ち上がってきた。そしてその事前の調査として、奈良国立文化財研究所が発掘調査を担当することとなったのである。

奈文研の発掘調査 発掘調査は、以下に述べるように、1976年度にまず塔跡から着手し、あわせて中門跡と西面回廊（第1次）を調査した。続いて、金堂と北面回廊（第2次；1977・1978年度）、講堂と北面回廊（第3次；1979年度）、東面回廊と寺域東限（第4次；1982年度）、東面回廊（第5次；1983年度）、東面回廊と寺域東北部（第6次；1984年度）、南門（第7次；1989年度）、寺域西限と宝蔵（第8次；1990年度）、寺域東南部（第9次；1994年度）、南面回廊（第10次；1996年度）、寺域南方（第11次；1996年度）の順におこなった。

公有地化 発掘調査の進展にともない、指定地の買い上げ事務も進展していった。とりわけ1982・1983年の両年度には約1.8haの土地が地元の協力によって公有地になり、指定地の内、周辺部分に民有の土地が残るものの、中心部分はほぼ全域が公有地となり、整備工事の立案と速やかな着手が望まれたのである。

整備工事 山田寺跡の史跡整備工事については、川原寺跡と同じように、文化庁文化財保護部記念物課が主務するところであり、1993年度から5箇年計画で事業に着手すべく、各種の調整がはかられた。その中で、伽藍中央部分については、これまでの発掘成果から整備に向けての資料がほぼ揃っているものの、寺域の西限や南限についてはなお発掘調査による遺構の解明が求められ、第7次以降の調査を整備計画の立案と整備工事の進行に伴って実施していった。

整備工事 山田寺跡の整備工事は、寺域内水田跡地の湿地状地盤の改良や山側からの湧水および排水のための処理施設などに想定以上の経費や日時を費やし、当初の5箇年計画の枠には収まらない事態に立ち至った。しかしながら、予算の追加や工事の延長が認められず、史跡地入口部での案内広場および説明版の設置などを1999・2000年度に追加整備するに留まり、当初考えた基壇や礎石の復元配置などは、近い将来採択されるであろう第2期事業へと引く継ぐこととなった。ともあれ、山田寺跡の発掘調査と整備事業は、2000年度をもって一応の区切りを迎えた（Color Ph. 1下）。その一つの節目を飾るものとして、本報告書の出版が位置づけられるのである。

1) 学報第63冊。この番号は、奈良国立文化財研究所創立時からの番号を継承している。

2) 高橋健自「古刹の遺址」『考古界』第4編1号、1904年。

3) 天沼俊一「山田寺址」『奈良県史蹟勝地調査会第四回報告』1917年。

2 報告書の作成

今回の報告は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、1976年度から1996年度にかけ、特別史跡「山田寺跡」において実施した11次にわたる発掘調査の報告である。

以下に、特別史跡山田寺跡に関わる発掘調査の責任者（所長・部長）と担当者を掲げ、他の調査組織関係者は一括して列記しておく（※は研究補佐員）。

次数	年度	所長	部長	発掘調査担当者
第1次	1976	小川修三	工藤圭章	上野邦一・山崎信二
第2次	1977・1978	坪井清足	工藤圭章	松本修自・上野邦一
第3次	1979	坪井清足	工藤圭章	川越俊一
第4次	1982	坪井清足	狩野久	川越俊一
第5次	1983	坪井清足	狩野久	岩本正二
第6次	1984	坪井清足	狩野久	土肥孝
第7次	1989	鈴木嘉吉	牛川喜幸	川越俊一
第8次	1990	鈴木嘉吉	牛川喜幸	山岸常人
第9次	1994	田中琢	牛川喜幸	黒崎直
第10次	1996	田中琢	猪熊兼勝	佐川正敏
第11次	1996	田中琢	猪熊兼勝	黒崎直

佐藤興治、細見啓三、岩本圭輔、加藤優、木下正史、大脇潔、花谷浩、巽淳一郎、西口壽生、新田洋*、立花聡*、小笠原好彦、鬼頭清明、内田誠*、千田剛道、広瀬雅信*、辻秀人*、井上直夫、松村恵司、西弘海、坂野和信*、金子裕之、丸川義広*、盛峰雄*、泉雄二*、大林達夫*、藤田盟児、藤田広幸*、井上和人、菅原正明、滝本正志*、村上詔一、立木修、清水真一、宮川伴子*、安田龍太郎、納谷守幸*、高野学*、相原嘉之*、佐伯博光*、伊藤敬太郎*、伊藤武*、羽鳥幸一*、河村裕一郎*、水戸部秀樹*、神田高士*、橋本義則、深澤芳樹、南時夫*、山本忠尚、西川壽勝*、村田和弘*、荒木浩司*、村上隆、寺崎保広、島田敏男、長尾充、小澤毅、岩永省三、鈴木恵介*

〈事務局：加藤建夫、刀谷敏博、飯田信男、西田健三、新井耕治、櫻井雅樹、稲垣耕正、望月正治、石谷幸子、山下（旧姓大西）洋子、吉岡（旧姓直嶋）佐和子、木寅貢志、松本誠〉

報告書の作成は、1992年度から5箇年計画で開始した。遺構関係の整理は、遺構調査室が中心となり、遺物の整理は、瓦磚類、土器類、木製品、金属製品、石製品を考古第一および第二調査室が担当し、木簡と墨書土器等の釈読には資料調査室があたった。また、建物の部材や石材の分析と保存処理には、埋蔵文化財センターの遺物処理研究室（現古環境研究室、保存修復科学研究室）などの協力を得た。

本書の刊行に先立って、山田寺跡の調査成果の概要は年度ごとの『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』（以下、『飛鳥・藤原宮概報』と略す）や『奈良国立文化財研究所年報』（以下、『年報』と略す）などに逐次報告するとともに、1995年2月から1997年8月までの間に計6回の「山田寺学報検討会」を開催し、調査部および調査・整理関係者の意見調整をはかってきた。その経緯は別に『山田寺学報検討会記録』（内部資料）としてまとめている。

第I章 序 言

本報告は、以上の成果を踏まえ、調査部を中心とする各執筆者が遺構や遺物を整理検討した内容をまとめたものである。調査時点の見解や『飛鳥・藤原宮概報』の解釈とは異なる点もあるが、本報告をもって正式な見解とする。なお、1994年度には『山田寺出土建築部材集成』（『奈良国立文化財研究所史料』第40冊）を刊行し、第8次調査までの出土部材と回廊に対する建築的考察を行っているので、併せて参照されたい。本書の執筆分担は次のとおりである。

第I章 黒崎 直

第II章 寺崎保広（現 奈良大学）

第III章 1・2 A 黒崎、3・4 毛利光俊彦、2 B 小野健吉

第IV章 1 A 小野、1 B・2 A・2 K i・2 K ii 毛利光、2 B～2 F 島田敏男（現 文化庁）、2 G～2 J 藤田盟児（現 名古屋造形大学）、2 K iii 千田剛道

第V章 1 寺崎、2 A・2 C・2 G 佐川正敏（現 東北学院芸術大学）、2 B・2 D・2 F・2 H・2 I 花谷 浩、2 E・2 L 伊藤敬太郎*（現 ㈱国際航業）、2 J 伊藤 武*（現 大阪府文化財調査研究センター）、2 K・2 M 毛利光、3 深澤芳樹、4 上原真人（現 京都大学）、5 岩永省三（現 九州大学）、6 大脇潔（現 近畿大学）、7 松村恵司、8 千田、9 長尾 充、10 箱崎和久

第VI章 1・2 A 島田、1・2 D 藤田、2 B・2 C 長尾、2 E 小澤 毅、3 A・3 C・3 E 佐川、3 B・3 H 花谷、3 D 伊藤敬太郎、3 F 伊藤 武、3 G・5 毛利光、4 深澤

第VII章 毛利光

補論 1 肥田路美（早稲田大学）、2 高妻洋成、3 光谷拓実、4 肥塚隆保、5～7 村上 隆

英文要約（English Summary） Edwards Walter（天理大学）

金属製品、ガラス製品、建築壁材および彩色顔料の分析は村上隆、木材の年輪年代測定と樹種鑑定は光谷拓実（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）、石材の鑑定は肥塚隆保（同前）、漆膜の観察は高妻洋成（同前）があたった。それらの成果は第IV・V章に引用し、一部は補論に収録した。木簡の釈読は寺崎保広と橋本義則が行い、宮川伴子が協力した。英文目次・要旨の作成には天理大学山本忠尚氏の協力を得た。

写真撮影と印刷用複製は、井上直夫が担当し、中村一郎と岡田愛が協力した。ただし、補論に使用した写真の大半は、各執筆者が撮影した。図面・挿図・表等は各執筆者が作成し、以下の各氏の協力を得た。

羽鳥幸一*、渡辺淳子*、水戸部秀樹*、清水尚子*、田福 涼*、西川雄大*、加藤貴之*、前岡孝彰*、小谷徳彦*、稲田登志子、猪熊誇末、八木あゆみ、山下洋子、菊川弥生、森上奈子、佐々木聖子、乾 陽子、小野沢亮子、西澤佐和子、森田和世、富永里菜、笥 和也、上田素土子、森下しのぶ、小倉依子、北井 緑、野瀬倫子

本書の編集は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部長田辺征夫及び前部長黒崎直の指導のもとに、毛利光俊彦が行った。1999年9月に開始したが、基礎的な作業に追われ、本格的な編集に入ったのは2001年10月であった。この間、諸氏や諸嬢らから多大の助力を得た。校正の多くは宮川伴子が担った。衷心より謝意を表す。